

日蓮の立正安国論について

法華経を理解する上で、是非ともその説教会場「靈鷲山」と釈迦がそれを超えたとされる世界最強の宗教「シヴァ教」を理解しておいていただきたいと考え、法華経を語る前に既にそれらについて書いた。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/ryoujyusen.pdf>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/sivakyou.pdf>

お経には、般若心経や華嚴経や阿弥陀経など数え切れないくらいのお経があるが、釈迦が本当に説きたかったのは法華経で、他のお経は法華経を理解させる準備、方便の為に説かれたお経だとされている。法華経は、天台宗と日蓮宗の基本教典であるが、大乘仏教のもつとも優れたお経と言っているのではないかと思う。

私たちは多くの欲望を持つが故に悩みから抜けきれないし、死ぬ時も極楽浄土を願わずにはいられない。そのために、私たちの煩惱を救うために仏教というものがあるのかもしれない。しかし、この世の中が良くなると個人が幸せにならないという面も強いので、私としては、国家のあり方や社会のあり方との関係から言えば、大乘仏教の重要性を思わざるを得ない。大乘仏教の代表的なものが法華経であり、国家のあり方や社会のあり方との関係という観点から法華経の勉強を始めたいと思うが、まずは深刻な社会問題を直視するところから始めよう。

働き過ぎによる、過労死、ストレス、うつ病等深刻な問題が増えている。長時間労働の結果、労働による肉体的な負荷だけではなく、睡眠や休養、家庭生活や余暇の時間の不足が問題になっているのだ。赤ちゃんや思春期の子供たちに多い睡眠リズムの崩れに起因する精神的不安定者も増えているらしい。さらに、近年SAS（睡眠時無呼吸症候群）に関連する交通事故が増えているが、これも基本的には過労によるものだ。残飯などとして廃棄する食べ物が年間13兆円分とあいかわらずの日本の飽食ぶりはひどい。不況や就職難で奨学金が返済できず、厳しい取り立てを受けたり、自己破産したりする若者が急増している。こういう若者はろくに食べる事もできずに、盗みを働いたり、ブラック産業に手を染めるのだ。現代の若者の死因は、交通事故死や病死でもなく、死の半数は「自殺」先進主要国（G7）で20代と30代の死因のトップが自殺などという国は日本以外にはない。家庭が貧しく給食費や学用品代などの就学援助を受ける児童生徒が2012年度全国の公立小中学校で約155万人に上ったことが文部科学省の調査で分かったが、これは一人親の増加など、経済的に困窮する家庭が増えているからだ。人は生きるために働かなければならない。しかし、その働き口がないとか赤ちゃんを保育所に預けないと働けないという人が増

えている。東京23区でこの5年間で認可保育所に入れない子どもの数は2.6倍に急増した。ブラック産業やブラック企業など日本企業の体質が悪くなってきている。近年、有名人の自殺・他殺死・変死が増えているが、これもブラック産業に問題があるのかもしれない。また、若者がブラック産業に手を染めるブラックバイトも増えている。毎年120万人の子どもたちが人身売買されているらしい。家族の問題も深刻だ。内閣府の調べでなんと3人に1人がDV被害に遭っているという驚きの実態が判明した。また、高齢になっても未婚で家族からの保護が受けられない「家族難民」が増えている。

その他にも深刻な社会問題はあろうかと思う。とりあえず私の気のついた問題だけをピックアップしたが、現下の深刻な社会問題はもちろん私たち一般国民もその解決に向かってできるだけ努力は傾けるとして、やはり政治家や宗教家の責任もあるので、政治家や宗教家は精一杯の努力をしてほしい。宗教家が大乗仏教の立場から、必要な宗教活動をしていけば、政治家の中で発奮する人も出てこよう。

そんな願いを込めながら、早速法華経の勉強を始めたいのだが、実は、もうひとつ触れておかなければならないことがある。それは、日蓮の立正安国論に関連することだ。老子の哲学もそうだが、釈迦の哲学も、その心髄、宇宙の原理を感じ取り、その原理にしたがって、この世の中、娑婆におけるさまざまな悩みに対する根本的解決方法を、釈迦のように便法として具体的に提示できなくても、もっとも大事なことを政治家や宗教家に教えることのできる、日蓮のような大僧正が出てこなければならぬ。私は今大事なことはそういうことだと思うので、まずは日蓮の立正安国論に触れておきたいのである。

日蓮の立正安国論については、北川前肇（きたがわぜんちょう）編の「原文対訳立正安国論」（平成11年3月、大東出版社）があるが、それには次のように述べられている。すなわち、

『「立正安国論は、旅客と主人との間に取り交わされた10の問答という形式で論述されている。まず第一の問いのところで、旅客が主人のもとに来て大いなる嘆きとして次のように語るところから始まる。近年より近日に至るまで、天変地異、飢饉や流行病によって、牛馬等の家畜はもちろんの事、多くの人たちが死に至っている。その悲しみは表現する事ができないほどのものである。幕府は神社仏閣に種々の祈禱を行わせているが、少しも効験（こうけん）もない。また、政治の方面では、徳政を行っているが、それも単なる慰めにすぎない。これはいかなる理由によるものか、というのである。これに対し主人は、私もこの事を非常に愁（うれ）いていたのであって、胸中に憤りを感じている。そこで、あなた（旅客）としばらく談話を致しましょうと、語りだすのである。そして、それらの災難が興起（こうき）する原因は、人々が正しい教えに背き、悪法に染まることによって、この国を守護する善神（ぜんじん）が国を捨て、聖人が所を辞した事によるものであると応（こた）える。つまり、国に正しい思想信仰が喪失して、邪（よこしま）な思想が充（み）ちているからだ、とその災難興起の根源を示すのである。』・・・と。

以上のように、日蓮には、「天変地異や疫病の原因は国に正しい思想信仰が喪失した事である」という基本的な哲学思想があるのである。この点に私は重大な哲学思想を見いだすのであって、天変地異や疫病という自然現象が国の思想信仰と関係があるという事が果たしてあり得る事なのかどうか、その事をじっくり深く考えてみなければならないと思う。このたびの東日本大災害の根源的な原因が国の思想信仰の乱れによるものかどうか？ 現在、東南海地震や富士山などの火山噴火が心配されているが、それをなくすには日蓮が実際に行ったように、「自然呪力」のための儀式を行なう必要があるのではないか？

日蓮は、実際に「自然呪力」のための儀式を行なった。天変地異や疫病を日蓮などの名僧の強力な祈りによって解消する、その強力な呪術を説明の都合上、私はすでに述べたように「自然呪術」と呼ぶこととしている。日蓮は、実際に「自然呪力」のための儀式を行なったのである。日蓮が鎌倉での布教を開始された当時、毎年のように、異常気象や大地震等の天変地異が相次ぎ、大飢饉・火災・疫病（伝染病）などが続発していた。特に、1257年8月に鎌倉地方を襲った大地震は、鎌倉中の主な建物をことごとく倒壊させる大被害をもたらした。日蓮は、この地震を機に、世の不幸の根本原因を明らかにし、それを根絶する道を世に示すため、駿河国（現在の静岡県中央部）にある岩本実相寺で一切経を読まれたのである。



立正安国論では、天変地異が続いている原因は、国中の人々が正法に背いて邪法を信じるという謗法（正法を謗ること）にあり、元凶は法然が説き始めた念仏にあると指摘されている。

そして、人々が悪法への帰依を止めて正法を信受するなら平和楽土が現出するが、悪法への帰依を続けるなら、経文に説かれている三災七難等の種々の災難のうち、まだ起こっていない自界叛逆難（内乱）と他国侵逼難（他国からの侵略）の二つの災難が起こるであろうと警告し、速やかに正法に帰依するよう諫められたのである。三災七難とは、穀貴〈飢饉等による物価高のこと〉・兵革〈戦乱のこと〉・疫病〈伝染病がはやること〉の3種の災いと、星宿変怪難〈星の運行や輝きが乱れること〉・非時風雨難〈季節はずれの風雨の災害が起こること〉などの7種の難をいう）。